

「船員の日」メッセージ

教皇庁移住・移動者司牧評議会は、毎年7月の第2日曜日を「船員の日」と定め、世界中の司牧者、信徒に船員たちのために祈るよう呼びかけています。

今年、「船員の日」を迎えるにあたって、去る3月11日、東日本を襲った地震とそれに続く津波、原発事故の出来事を振り返り、今一度、海で働く人たちに目を向け、祈りたいと思います。今回の津波は沿岸地域のあらゆるものをことごとく破壊し、海に引きずり込んでいきました。海で生活する漁師や船員たちは生活の基盤である船を失い、しかも原発事故による放射性物質を海に捨てるという事態も重なり、これからどう生きていけばいいのか途方に促されています。

私たちは今回の災害で、漁師に限らず、海で働く人たちの大変さを改めて思い知りましたが、彼らは日常的にこうした災害や事故と隣り合わせで働いています。私たちの生活に必要な物資のほとんどは、漁業であれ、貿易であれ、港を介して届けられるものですが（日本の輸入の99.7%）、そこで働く彼らの仕事の重要さと大変さについてほとんど知らないというのが現状でしょう。

遠洋漁業や輸出入に関わる漁師、船員たちは、一度海に出ると何ヶ月も家に帰ることができません。揺れ続けている船の上が仕事の場であり生活の場となります。悪天候やさまざまな事故、時には海賊の難、船上での病気など、陸上では想像できないほどの危険と苦労、ストレスがあります。こうした中で、訪れた港では唯一ほっとできる一時を持つことができるわけですが、最近は特にコンテナ船などの場合、経済的な理由から港に長く留まることをせず、数時間の滞在ですぐ出航するというケースも多くなっています。

皆さん、船員の立場に立って想像してみましょう。このような状況の中で、もし外国の港で誰かが待っていてくれたら、自分たちの存在と働きをしっかりと覚えていて祈っていてくれる人がいたら、どれだけうれいことでしょうか。船員たちの中には、港に停泊している間に少しでも教会に行きたくて祈りたいというカトリック信者も少なくありません。

船が入港した時、船員たちを友として暖かく迎えようと訪船活動をしている教会のメンバーたちがいます。皆さんは訪船することは難しくても、船員たちのために祈り、また彼らのために訪船している人たちの活動を献金などで支えて下さるようお願いします。そして、機会があれば、ぜひ訪船活動に参加し、船員たちと出会って下されば幸いです。

2011年7月10日

日本カトリック難民移住移動者委員会
委員長 松浦 悟郎（大阪教区補佐司教）

「東日本大震災からの復興にむけて」司教団メッセージ

兄弟姉妹の皆様

3月11日の東日本大震災からはや3カ月が過ぎました。

今回の東日本大震災によって、2万人近い方々が亡くなられ、いまだ、多くの人々が行方不明のままです。私たちは祈ります。

いつくしみ深い神よ、家族や友人たちとの別れを語ることでできずに亡くなられた方々をあなたのみ手のなかに受け入れてください。また、遺された家族や友人たちにこの悲しみを乗り越えて生きていく希望をお与えください。

また、住宅、工場、田畑、港湾などでも大きな被害がでました。さらに、原発事故による被害も甚大です。多くの方が避難所、仮設住宅などでの不自由な生活を余儀なくされています。私たちは祈ります。

救いの源である神よ、苦しみの淵からあなたに叫ぶ人々を顧み、その重荷を一日も早く取り除いてください。家族や地域の絆を回復し、希望のうちに共に歩むことができますように。

いまだ、原発事故収束の見通しもついていません。東日本大震災からの復興は長い道のりになるでしょう。6月13日から17日に開催された司教総会において、私たち司教団は「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」（コリントの信徒への手紙一12:26）と切実に語るパウロの言葉を実感し、復興支援により一層力を入れて取り組むことを決意しました。

これまでカトリック教会ではカリタスジャパンを中心に支援活動を行ってきましたが、被害の大きさ、復興の長期化に鑑み、日本の全教区が直接に、そして具体的に、復興にむけての支援にあたることを決定しました。司教団の意図を汲んでいただき、司祭・修道者をはじめ、兄弟姉妹の皆様に継続的な協力を共にするよう呼びかけます。

最後になりましたが、国内外の皆様の祈りとあたたかい支援に心から感謝いたします。今後とも共に歩めるように祈ります。

2011年6月17日

定例司教総会最終日

日本カトリック司教団一同

アヴェ・マリアの祈り

アヴェ、マリア、^{めぐ み かつ}恵みに満ちた方、
^{しゅ}主はあなたとともにおられます。
あなたは女^{おんな}のうちで祝福^{しゅくふく}され、
ご胎内^{たいない}の御子^{おんこ}イエスも祝福^{しゅくふく}されています。
^{かみ ははせい}神の母聖マリア、
わたしたち^{つみ}罪びとのために、
^{いま し むか とき いの}今も、死を迎える時も、お祈りください。
アーメン。

(2011年6月14日 定例司教総会にて承認)

「アヴェ・マリアの祈り」正式口語訳について

1. 口語訳改訂の経緯

かつての『公会堂祈祷文』に掲載されていた文語による「天使祝詞」は、他の多くの日常の祈りとともに口語による「聖母マリアへの祈り」として、『日々の祈り』（1993年9月15日発行）に掲載され、以来今日まで使用され浸透してきました。その間、聖書のことば（ルカ1・28、1・42）に基づく「アヴェ・マリア」のラテン語原文にできるだけ忠実な口語訳を作成してほしいという要望を受けていた司教団は、改訂の必要性を認め、昨年2010年10月8日に開催された特別臨時司教総会で、「アヴェ・マリアの祈り（試用版）」を作成し、2010年12月8日から2011年3月25日まで試用して、全国の皆様のご意見を求めました。短期間の試用ではありましたが、446件のご意見が寄せられました。司教団からのお願いに多くの皆様が応えてご意見を提示してくださったことに対して、心から感謝いたします。

そして、このたび開催された2011年度定例司教総会において、皆様からいただいたご意見をふまえて試用版について再検討し、正式口語訳を承認するに至りました。再検討にあたっては、以下の点を基本方針としました。

- ①口語訳（現代語訳）の祈りの正式版をめざすこと。
- ②ラテン語原文にできるだけ忠実な翻訳をめざすこと。
- ③日本語の祈りとしての流れやリズムを大切にすること。
- ④外国籍の信者に配慮すること。

大切な祈りをたびたび変えるべきではない、ようやく祈りを覚えたのになぜ今変更しなければならないのか、など厳しいご意見もあり、また、すでに親しんでいる祈りを新しい祈りに変えることによって混乱が生じるおそれもありますが、司教団としてはよりよい祈りを用いていただくために、改訂された口語訳を承認したしだいで

2. 正式口語訳について

①表題「アヴェ・マリアの祈り」

文語の祈りは「天使祝詞」、口語訳は「聖母マリアへの祈り」と呼ばれてきましたが、下記②の説明にあるように、ラテン語原文の冒頭の“Ave, Maria”を片仮名で表記することにしたため、祈りの表題もそれに合わせて「アヴェ・マリアの祈り」にしました。外国語の書名や楽曲名などを片仮名で表記する際の慣例に従い、表題には中点「・」を使用して「アヴェ・マリア」と表記しました。

②「アヴェ、マリア、」

ラテン語の祈りは、“Ave, Maria”という呼びかけで始まります。ルカ1・28に基づくこの“Ave”というあいさつのことばは、「聖母マリアへの祈り」では省かれていました。『聖書 新共同訳』では「おめでとう」、フランシスコ会聖書研究所訳『新約聖書』では「喜びなさい」などと訳されています。けれども、たとえば臨終や通夜の式の中でロザリオの祈りを唱えるような場合、「おめでとう」や「お喜びください」、あるいは文語の祈りの冒頭の「めでたし」などでは唱えにくいとの意見が従来からありました。

試用版に対しては、ラテン語で始まる祈りに違和感を覚える、“Ave”は無理に訳す必要がない、などのご意見がある一方で、外国からの信者のためにはなじみやすい、とのご意見もありました。また、「アヴェ、マリア」ということばは、キリスト教以外においてもすでに歌曲名等で定着していると思われる。これらを考慮したうえで、“Ave”をふさわしい日本語に訳すことはできないため、試用版のとおりラテン語原文の冒頭のことばを片仮名で表記することとしました。

ラテン語の“Ave”の背景には、新約聖書ギリシア語原文の“chaire”ということばがあります。この呼びかけのことばの深い意味は、カテケジス（教理教育）によって解き明かす必要があります。

③「恵みに満ちた方、」

「聖母マリアへの祈り」では「恵みあふれる」と訳されていましたが、ラテン語の“plena”（満ちる）により忠実な訳として「恵みに満ちた方」としました。「満ちた方」では、マリアが神からの恵みに満たされた方であることを表していないとのご意見があり、「恵みに満たされた方」、「神の恵みに満ちた方」などの代案も検討されましたが、日本語としての唱えやすさを考慮し、また誤解のおそれは少ないと判断して、「恵みに満ちた方」を採用しました。

④「主はあなたとともにおられます。」

「おられる」は文法的に誤りではないかとのご指摘がありました。国語の専門家からは、「おられる」には明治期以来の用例があり、すでに市民権を得た表現であるとのご意見をいただきましたので、試用版どおりにしました。

⑤「あなたは女のうちに祝福され、」

「聖母マリアへの祈り」の「主はあなたを選び、祝福し」については、ラテン語原文の“in mulieribus”（女の中で）が訳されていないとのご指摘がありました。また、主なる神を主語にして「主はあなたを選び」と訳したため、原文にはない「選び」が用いられていました。

今回は上述した改訂の基本原則に従って、これらの点を再検討しました。「女」については、現代語の用い方からみて適当ではない、「女性」のほうがよい、などのご意見がありましたが、「女性」は祈りの表現としてまだ自然とはいえないと判断し、試用版どおり「女」を用いることとしました。

⑥「ご胎内の御子イエスも祝福されています。」

「聖母マリアへの祈り」で「あなたの子」と訳されていた箇所は、ラテン語原文の“fructus ventris tui”（あなたの胎の実）の“ventris”（胎）を訳して「ご胎内の御子」としました。「胎内」については、医学の専門用語のような印象を受けるとのご意見も寄せられましたが、適当な代案は見いだせませんでした。また、“fructus”の文字通りの意味は「実」、「果実」（英語では“fruit”）ですが、日本語の祈りの文章にはなじまないため「御子」を採用しました。

「祝福されています」については、「聖母マリアへの祈り」の「祝福されました」に、過去に行われた行為の継続性が含まれているとのご意見がありましたが、行為の継続性を明確に表す表現として「祝福されています」を採用しました。

この「あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。」の箇所は、かつての「天使祝詞」とよく似た表現になっています。これ以上に適切な代案を見いだすことができなかつたということになりますが、この箇所についてもカテケジスが必要であると考えています。

⑦「神の母聖マリア、」

「神の母」ではマリアに対する尊敬が感じられない、とのご指摘がありましたが、試用版どおり「神の母」を採用しました。

⑧「わたしたち罪びとのために、」

試用版の「罪深いわたしたちのために」に対しては、試用版を準備する段階でも検討されていた「わたしたち罪びとのために」を支持するご意見が寄せられました。「罪深い」と「罪びと」についてあらためて検討し、原文“pro nobis peccatoribus”により近い「わたしたち罪びとのために」を採用しました。

⑨「今も、死を迎える時も、お祈りください。」

試用版の「祈ってください」は丁寧な表現ではあるが尊敬を表していないとのご意見をふまえて、「お祈りください」を採用しました。

3. 使用にあたってのお願い

今後は、今回承認された「アヴェ・マリアの祈り」が正式な口語訳となります。したがって、従来の口語訳の「聖母マリアへの祈り」と文語による「天使祝詞」は公式には用いないことといたします。

新しい口語訳に慣れるまでにはしばらく時間がかかると思いますが、個人で、あるいは共同でこの祈りを繰り返し唱えて、少しずつ親しんでいただきたいと思います。

また、司牧の現場においては、この新しい口語訳「アヴェ・マリアの祈り」の理解を求める信徒の方々や、子どもたちへの信仰教育、成人のキリスト教入信式への準備段階をはじめ、カトリックの幼稚園や学校などにおいても、折にふれて「アヴェ・マリアの祈り」の内容に関するカテケジスを行い、この伝統的な祈りに対する理解を深めてくださるようお願いいたします。

2011年6月14日

日本カトリック司教協議会

新刊書籍案内

※ 「キリスト教理解のために—カトリック教育にかかわるすべての人に—」

日本カトリック学校教育委員会・編

※ 「回勅 真理に根ざした愛」 教皇ベネディクト十六世